

冬を探して

一面に広がるは、白。

少年は目の前の光景に言葉もなく立ち尽くす。かじかむ手足のことなど忘れ、ただ純白の雪に見入る。降り続く雪は止むことを知らないように次から次へと地上に舞い降りる。

遠い遠い北の果て、一年中雪の止まない土地。キツサキシティ。

「これが……」

少年が息を吐く度に白い靄が現れる。それに気づくこともなく少年は呟く。

「これが、雪……」

思い出すのはくすんだ色で覆われ、どこもかしこもじやりじやりとした故郷。雪に似ていると教えられたものと、雪はあまりにも違っていた。踏み締める感触も、舞い降りる様子も。

白の景色に似合わない浅黒い肌を持つ少年は、大きくしゃみをすると我に返った。体が酷く冷えきっていた。彼にとつては生まれて初めて感じる強烈な寒さだった。手も足も、かじかむという言葉を超えて、痛い。感覚は麻痺しているのに、じんじんと鈍い痛みがあった。これでもかというほど、防寒対策をしてきたはずだった。けれど、それを嘲笑うかのように、寒さが彼の体を蝕む。

空を仰ぐ。鉛色の雲が重く空を覆っていた。振り返れば港は忙しく働く人々ばかりで、彼のようなよそ者の姿は見えなかった。彼はナギサシティから来たフェリーを降りて、雪に意識を取られ足を止めたのだ。同じフェリーに乗っていた客たちはとうにバス停へ向かったようだった。

町外れの港から中心街へは直通のバスが出ています。決して歩いて行けない距離ではない。だがここキツサキシティでは、どこもかしこも雪が積もり、歩くのは少々難儀だ。それゆえ、大抵の観光客は素直にバスを利用する。

彼が最寄のバス停にたどり着いた時には、バスはとうに行ってしまっていた挙句、次のバスが来るまでかなりの時間が空いていた。そもそも本数自体が少ない。

彼は少し考えた後、雪の積もる道を歩いて行く。フェリー乗り場でおとなしく次のバスを待つという手もあった。少々建物は古びてはいたが、暖房が効いていたし、バスを待つには十分である。けれど、そうはせずに歩くことにした。寒さを除けば、これも悪くないと彼は思う。歩いている間に雪を思う存分見れるだろうし、体も温まるだろうと。

どこまでも続く道に、体はくたびれ目は白いばかりの光景にちかちかとしてきた。人が生活している気配を感じられるような場所に辿り着くまでに、彼はくたくたに疲れてしまった。距離自体はたいしたことないと思える。けれど雪道というのは乾いた道と違い、歩くだけで酷く疲労した。

はあとため息をつくとき、白い息が目の前に現れる。歩いたおかげでたしかに体は温まったが、手足の先は冷え切ったままだったし、露出している顔も冷えすぎて痛い。息を吸うと冷たい空気が気管を通り過ぎていくのを見て、何より鼻が痛かった。

時折車が通り過ぎていくのを見て、やっと人の生活圏に入ったのだなと実感した。いくらか

人通りがあるのか歩道には足跡がいくつも残っていた。決して、先程までと比べて歩きやすいということはない。むしろでこぼことして歩きにくくさえある。しかし立ち止まったところでポケモンセンターには近づかない。鈍痛を訴える足を引きずり、黙々と歩く。

そんな時、ふと目に飛び込んだのは薄紅色。まばたきをしてよくよく見れば、薄紅色のコートを纏った一人の少女が、ぼつねんとバス停に立っている。年はいくつだろうと彼は考えた。自分が旅立った年齢よりはいくつか上、そして今の自分よりも幾分年若いように思った。十二、三くらいだろうかと見当をつける。少女もまた、彼に気づいてこちらを見る。

彼を見つめるその瞳は、船の上で見た深い海の青を思い出させた。生まれて初めて北の海を見た彼は、そのあまりの暗い色に驚いたものだった。それによく似ていると彼は思った。

そして、雪のように白い肌に目がいく。この地特有のものだろうか。彼の故郷では見たこともないくらい白い白さだ。

「何かご用ですか」

少女が不審者を見るような目で見ていることに、声をかけられて気づく。つい、無駄にもまじまじと見てしまった。たじろぎながら彼はどうにか返答する。

「その、フェリーで来たんだけど、バスが行ってしまって。ポケモンセンターまで歩いていくところ」

その答えに少女はああなるほどと呟く。

「ポケモンセンターの場所はわかりますか？」

「うーん、とりあえず市街地に出ればなんとかなるだろうとしか考えてなかったな……」
少女は寸の間考え、

「じゃあ案内しましょうか」

と申し出てくれた。彼が迷惑だろうからと断りかけるが、

「わたしもバスが来るまで時間かかるとは思っています。ここでじっとしていても寒いだけだし」
それならと彼は少女の申し出を受けた。

少女はコハルと名乗った。

「春生まれだけどコハル」

コハルは悪戯っ子のような笑みを浮かべる。彼は一瞬、考え込むと、コハルに合わせるように名乗る。

「俺はリヨースケ。暑い日生まれだけどリヨースケ。名前くらいは涼しく、って」

「そんなに暑かったんですか」

「生粋のホウエン人がそう思うくらいには」

二人で笑い合う。

と、リヨースケのズボンをくいくいと誰かが引つ張る。その時によやく気がついたのだが、コハルの傍らにはあまり背の高くないポケモンが付き従っていた。コハルの陰に隠れて見えなかったようだ。

「この子はユキちゃんです」

頭や顔と思われる部分は白いのだが、腹の辺りから下は茶色で、手先やしっぽなどは緑色である。この寒さにも関わらず、平気そうな顔をしているようだから、氷タイプだろうと予想はついた。だが、手先などを見ると草タイプのようにも見えた。まさか、本当に草タイプだろうかと思ねると、草・氷タイプのポケモンだと答えが返ってきた。ユキカブリというポケモンらしい。ユキカブリだからユキちゃんというのだろう。少々安直すぎないかと思っただがそれはおくびにも出さない。

「へえええ、そんなポケモンがいるんだ！」

素直に驚きを表すると、ユキカブリも興味津々といった様子でリョースケを見つめ返す。リョースケはユキカブリと視線を合わせるようにしゃがみ込む。

「よろしくな」

軽く手を出せば、リョースケの手と顔を交互に見、おずおずと手を握り返してきた。

「シンオウには変わったポケモンがいるんだなあ」

リョースケはよっこらしよと立ち上がる。

「そうですか？ わたしから見たらきつとハウエンのポケモンも変わっていると思う気がしますよ」

「それじゃあそれはお互い様ということだ」

その言葉を契機に二人と一匹は歩き出す。

「雪が見たくて」

キツサキシティに来た理由を問われたリョースケはそう答えた。

「どうしても雪が見たくなつたから、考えなしにホウエンからシンオウ行きの船に乗ったんだ。ただけど、着いたナギサシティは全然雪がなくて。シンオウならどこでも一年中雪が降るものだと思つていたよ。でもそうじゃないんだね」

「ここくらいですよ」

ふふふとコハルは笑う。二人が喋る度に、白い息が踊る。

「でもわたしも、ホウエンは一年中半袖で過ごせるイメージがあります」

「さすがに長袖着るくらいには寒くなるよ。でもこんなには寒くないし、雪もあんまり降らない」

「雪、降るんですか」

コハルは目を見開く。予想通りの反応に、リョースケは笑いを噛み殺す。

「年に何回かはね。でも積もらないから、こんなにたくさんの雪を見たのは初めてだ」

だから、船から降りて雪に夢中になつていてバスを逃したのだと言うと、子供みたいとコハルは笑う。

「まあね。でもイメージ通りに一年中雪の降るところがあるなんて驚いたよ」

「ああそれは冬の神様が……」

しまった、とコハルが慌てた様子で口を押さえる。

「冬の神様？」

「なんでもないんです」

コハルはぶんぶんと、首を横に振る。言いたくないことなのだろうと、リヨースケは話題を変えることにした。

「そういえばコハルちゃんは どうしてあそこにいたの？」

そう問えば、祖母の見舞いに行つた帰りだという。具合はどうかと尋ねれば、年齢が年齢だけにあまりよくないとコハルは答えた。

「なんとかして、元気になつてほしいんですけどね……」

俯いてしまったコハルに、リヨースケは内心焦る。話題の選択を間違つたと。どうにかしてまた別の話をするべきだと必死に考える。コハルのいやに白い肌を見て、これだとリヨースケは言葉を紡ぐ。

「ね、ねえ。キツサキシティの人は、みんなコハルちゃんみたいに肌が白いの？」

コハルは顔を上げて、ぱちくりとしてリヨースケを見た。リヨースケは日焼けして黒くなつた肌に視線が突き刺さるような感覚がした。

「……そうですね、あんまり晴れないですから」

そう言つてコハルは空を見上げる。どうやら話題を逸らせた通りヨースケは安堵する。そうしてリヨースケも空を見上げるが、コハルに会う前に見た空と変わらず、鉛色の雲が広がって

いた。

「一年中、こうなの？ 信じられないな。今時ならホウエンは毎日のように晴れているのに」
そう言つてリヨースケは、馬鹿みたいに明るい空と海を思い出す。明るい海はリヨースケを慰めてくれることが多かったけれど、今度ばかりはそうもいかなかった。なんだってあんなに、悩みなんかないとでもいうような色をしているんだと思つたのを思い出した。むしろ、あの明るさが逆に憂鬱で仕方なかった。だからシンオウに来た時、暗い色をした海を見てほつとしたのだ。

「夏はそれなりに晴れますけど、それ以外はだいたいこうですね」

コハルの声がして、リヨースケは我に返つた。明るい海も暗い海も遠ざかつて、ただただ白い現実に立ち戻る。

「じゃあさすがに夏は雪も降らないんだ」

「いえ、天気が悪ければ夏でも降りますよ」

信じられないといった目でリヨースケはコハルを見た。ホウエンは下手をすれば雪が降らない年すらあるというのに。

「私達にとつては普通ですよ」

コハルは平然と言ひ放つ。

四月にもなれば、半袖でないと動いた時暑くてしょうがないのが、リヨースケにとつての普通だ。場所が変われば普通と思つていることも変わる。

そう伝えると今度はコハルが信じられないといった目をする。それを見たりヨースケは苦笑した。

「だから、ナギサシテイに着いた時、寒くて寒くて。一応冬服着てただけどなあ」
「どうりでずいぶん厚着をしている人だと思いました」

リヨースケの格好はたしかに、コハルと比較するとかなりの厚着だ。これでもかというほど重ね着をしているせいで着膨れしている。ズボンも一枚ではなく、上からも一枚重ねているのだ。見るからにシンオウの人間ではないのがわかる。

対するコハルはコートに厚手ズボン、ブーツと暖かそうな格好をしてはいるが、あまり重ね着をしているようには見えない。マフラーすらしていないのだ。

「お店に行つてホウエン出身だ、つて言つたら考えられる限りの防寒装備してくれたんだよ。おかげで財布が軽くなった」

などと軽口を叩く。とは言え、こうやつて厚着をしてもかなり寒いとリヨースケは愚痴る。

実際、寒さは確実にリヨースケの体から熱を奪っていた。相変わらず、手足は冷え切つて鈍痛を訴えている。呼吸する度に冷え切つた空気が通るから、鼻は冷えすぎて尋常ではないくらい痛い。冷たいを通り越すと痛みになるのだなとリヨースケは思い知る。

「ほんとに寒がりなんですね、リヨースケさん。こちらへんの人は、真冬でもそんな格好しませんよ」

まあそうだろうね、とリヨースケは肩を竦める。反対に、とリヨースケは言う。

「反対に暑さには強いよ。特に、俺みたいに屋外ばかりにいるような連中は」

それにそういう連中はだいたい自分のように真っ黒に日焼けしているのだ、と続けた。肌の白い人間ばかりいるキツサキでは、さぞ肌の黒い自分は浮くだろうとリヨースケは思った。

「日焼けですか……ここだと無縁の言葉です」

その言葉に、リヨースケは笑いをこらえる。

「あつちの人が聞いたたら卒倒するかもしれないな。女の方は必死に日焼け止め塗って日焼けしないようにしているからさ」

「日焼け止めですか？ 使ったことありませんね」

その言葉にリヨースケはとうとう噴き出した。

そんな風に雑談を重ねるうち、ようやく目的のポケモンセンターにたどり着いた。やっとこの寒い地獄から解放される、とリヨースケは心の底からほっとした。そしてふと、

「ねえコハルちゃん。ここまで案内してもらったお礼に、飲み物でもおごりたいんだけど、どう？」

リヨースケはそう切り出した。

「えっ、そんな。いいですよ、たいしたことないですから」
遠慮するコハルにリヨースケは苦笑して続ける。

「俺、全然シンオウのこともキツサキシテイのことも調べないで来たからさ。ついでに教えてもらえたらなあつて。だから、その講義代も込みで飲み物一杯は……やつぱり安いかな？」
そういうことならとコハルは笑って了承した。

リヨースケはコハルの分も飲み物を買おうと、すでに席についていたコハルの向かい側に座った。ポケモンセンターまでコハルと一緒に来て来たユキカブリは姿を消していた。

「ユキちゃんの分は本当にいらないの？」

「こういうところって、暖房を観光客の人に合わせてるんです。だから、ユキちゃんにはこの中、暑すぎて。いつもポケモンセンターの中ではボールに入ってもらうことにしているんです」
言われてみれば、ポケモンセンター内はかなり暖房が効き、リヨースケでさえも暖かいと感じるほどだ。中に入った瞬間、リヨースケは生き返るような気分になったのを思い出す。

「なるほどね」

コハルを見れば、コートだけでなくさらに上着を脱いでいる。キツサキに住んでいるコハルですらそうなのだ。氷タイプのユキカブリにとって、ここは快適な場所とは言い難い。

「それでさ」

リヨースケは本題に入ろうとする。

「はい、なんですか」

にこりとコハルは応じた。

「冬の神様って、何？」

コハルの笑みが凍る。

「なんかさつきちよつと言いかけてたから、気になっちゃって。キッサキシテイでは有名な話なのかなー、って」

違った？ とリョースケが尋ねれば、コハルは首を振る。リョースケはその意味を取りかねる。話したくないということなのか、それとも有名ではないということなのか。

「言いたくないことだったら、ごめんね」

「いえ……」

コハルはうつむいて、それきり何も言わない。リョースケは内心、失敗したどうしよう女の子を傷つけるとか最悪だ、と自己嫌悪する。

やがて、おずおずとコハルが顔を上げる。北の海の青を宿した瞳が、まっすぐにリョースケを見つめる。

「大した話じゃないんです。でも、聞いてくれますか」

リョースケはぶんぶんと首を縦に振り、精一杯了承の意志を伝える。

「キッサキシテイに一年中雪が降るのは、冬の神様がいるからなんです。でももう、知っている人はあんまりいないんですけどね」

そう前置きしてコハルはリョースケに伝承を教えてくれた。

冬の神はその名の通り、訪れた土地を冬にする。北から南へ、各地を冬にするため飛び回る。ところが、冬が終わったとき冬の神には居場所がない。なぜなら、冬の神がいる限り、冬は終わらないからだ。

困り果てた冬の神に、北の果てに住むキツサキの民が言った。

「この土地の民は皆、寒さにも雪にも慣れていきます。どうか我らの土地へおいでください」
冬の神は居場所を与えた彼らに深く感謝し、キツサキの民にこう告げた。

「私はお前たちから大地の恵みを奪うだろう。しかし、代わりに冬がお前たちを守るだろう」
それ以来、キツサキは雪の止まない土地になったという。

「へー、そんな話が」

特段、変わった話でもなければ悪い話でもない。ならばなぜコハルは話すのを躊躇ったのだろうか。

「でも、なんでコハルちゃんはこの話をしたくなかったの？」

コハルの瞳がその心を映してか、揺れる。

「みんな……忘れてしまったから」

「どうして？」

「他にもっと有名なものがあるんです。キツサキ神殿とかエイチ湖とか」

キツサキ神殿には巨人が封印されているという。大陸を引っ張って移動させるほどの力を

持った巨人。そしてまた、大昔には神々と戦ったという。

エイチ湖にはシンオウ神話で心を司る三神の一柱、知識を与えるユクシーがいると言われているらしい。時折、体を抜け出した魂なのか、透明なユクシーの姿が目撃されるという。

キツサキシティを訪れる観光客はこのどちらか、あるいは両方、でなければスキー場へ行くのがほとんどだそう。冬の神は、目に見えてわかりやすいシンボルがある訳でもその姿が度々目撃される訳でもない。だから今では地元の人間ですら話題に出さなくなってしまったらしい。老人ならば知っているかもしれないが、若い世代であればほとんど知らない、興味もない状態だという。そうやってしまえば、冬の神などと口に出しても笑われるか無関心に聞き流されるかだろう。

「悲しいね」

コハルの話を聞いて一言、リヨースケは言った。コハルは苦いものでも食べたかのように、顔を歪ませる。それでも、とコハルはふつと表情を戻して告げる。

「私、きつと冬の神様はいるって信じています」

彼女の目はまっすぐで、言葉だけでなく心から信じているのだとわかった。

「理由を聞いてもいいかな。あ、疑っている訳じゃないよ」

慌てて言い訳するように付け足す。リヨースケの様子に、コハルはほんの少しだけ表情を和らげた。

「おばあちゃんが、見たって」

「冬の神様を？」

こくり、とコハルが頷く。

「それはそれは美しい、氷の翼を持った鳥だったそうです。そして、まるで歌っているような美しい声が響き渡ったって」

なるほどね、とりヨースケは呟き、考えた。恐らくは入院しているという祖母のことだろう。きつとコハルはその祖母のことを慕っているのだ。

「その冬の神様ってどこにいるって言われているの？ あと、コハルちゃんのおばあさんはどこで見たの？」

「北です。北の方は開発が進んでなくて、たくさん山があるんです」

ホウエンの山といえばエントツ山であるが、ここは雪の降るキツサキシテイである。リヨースケはぼんやりと雪山を思い浮かべる。険しいのだろうか。

「山といっても、そんな高い山じゃないんです。小さい山がたくさんあって、あとは森が」

小さい山ということは、例えば子供でも登れるくらいだろうか。しかしここは年中雪の降る土地だ。

「うーん、雪がなければそこまで難しくないだろうけど、ここ雪がすごいからね……」

雪道を歩くだけでも乾いた道を歩く以上に疲労するのだ。小さいとは言え雪山を登るのは、どれだけ大変なことになるかは容易に想像できた。

「そうなんです。それに野生のポケモンもたくさんいるから危ないんです」

「まさか一人で行くとか考えたりしてないよね？」
「まさか。ユキちゃんには戦えないし、行きませんよ。それに、行くならとっくに行ってますよ」
それもそうかと話を打ち切った。

Message body

翌日も時間があるというコハルに、キッサキシティ内の案内をしてもらおう約束を取り付けた。連絡先の交換のためにポケナビを見せると、コハルは物珍しそうにしていた。シンオウにはないのかと尋ねると、ポケッチというものならあると答えが返ってきた。

アプリをダウンロードすることで様々な機能を持たせることができるらしいが、ポケナビとは違い、電話などはできないそうだ。彼女はポケモントレーナーではないので、ポケッチではなく携帯電話を持っていた。

アドレスを交換した後、ふと思いついて荷物から木箱を取り出した。故郷の土産物としてもよく知られる品を、今日と明日のお礼だと言って彼女に渡した。やはりと言うべきか遠慮されたが、自分はもう使わないのだと説明して、半ば押し付けるように渡す。彼女には申し訳ないが、彼にとっては一種の区切りをつけるためにも手放しておきたかったのだ。ポケモンセンター

内では使わない方がいいと伝え、その日は別れた。

翌日。約束した時間の十分ほど前に、リョースケのもとへコハルからメールが届いた。

『急用ができてしまって、今日は案内できそうにありません。ごめんなさい』

たったそれだけ書かれていた。あんまりだとリョースケは思った。昨日直接断れなかったからこうやって断ったのだろうかとか、断るにしてもあまりにも稚拙な言い訳であるとか、そんなに嫌だったのだろうかとか。リョースケはポケモンセンターのソファで一人うなだれた。

ポケモンセンターには人が多い。リョースケが顔を上げ、ぼんやりとしている間にも次々にポケモンを連れだした人間が目の前を通り過ぎていく。

ああそういえばここにはジムがあるのだと、コハルに聞いたことを思い出す。挑戦しないのかと尋ねられ、返答に詰まったことまで思い出した。挑戦できる訳がなかった。連れて来ているのは炎タイプのポケモン一匹だけだなんて、誰が言えよう。たしかにタイプ的には有利かもしれないが。曖昧に笑って挑戦はしないと云ったあの時、コハルは臆病者と思っただろうか。

「やめた」

考えるのはやめにしよう。考えたところで、鬱々とするだけだ。じっとしているとまた泥沼の思考に囚われそうな気がして、リョースケは立ち上がった。行く当てなどなかったが、雪中を歩くだけでも気分転換にはなるだろう。

ポケモンセンターの自動ドアをくぐると、外は相変わらず極寒の地だった。寒い。せつかく温まったリヨースケの体から一気に熱が奪い取られる。呼吸する度冷たい空気が体内に侵入して、体の中から冷えた。

じっとしては体が冷えるばかりだと、リヨースケはとりあえず歩き出した。どこへ行こうかとぼんやり考える。昨日コハルに聞いたキツサキ神殿にでも行こうか、それともユクシーがいるという湖か、はたまた滑ったこともしないのにスキー場へ行こうか。どれもしつくり来なかった。そもそもリヨースケは雪を見に来ただけであり、それ以外にやりたいことも行きたいところもなかった。

当たり前のように降り続ける雪に、リヨースケは幼い頃の記憶を重ねる。

いつだって当たり前のように、灰が降り続いていた。どこもかしこも灰で覆われてくすんだ色をしていて、靴底はいつもじやりじやりとした感触がした。灰が侵入しないように注意しても、建物の中だろうがどうしたつてじやりじやりとした感触からは逃げられなかった。手も足も、皮膚全体が、口の中でさえも灰の存在を感じ続けていた。

それが当たり前だと思っていたけれど、故郷を出るとそんな感触とは無縁だった。じやりじやりしない地面、床。走り回っても灰は舞い上がらず、咳込むこともない。洗濯しても異物感の取れなかった衣服は、いつの間にかそんなものがあつたことすら忘れ、当然のような顔をして滑らかさだけがそこにあつた。

けれど、人は信じないかもしれないが、リヨースケは決して故郷が嫌いではなかった。灰か

ら逃げることでできないそこはいつも異物感が付き纏ったが、それを当たり前のものとして育つたリヨースケにとつては必ずしも嫌なものではなかったのだ。

だが、リヨースケは逃げてきた。

ふと、今自分はどこにいるのだろうかという疑問に思う。つい考え込んでしまつて、行き先についてはまるで考えないままただ歩いてしまつた。自分はどこへ向かつている？

案内板を見つけたので現在地を確かめると、どうやらポケモンセンターの北にいるようだった。

なぜ北に向かつているのだろうか。そういえば、コハルは今頃何をしているのだろうか。

コハルの薄紅色のコートを思い浮かべた瞬間、急がなくてはと焦燥感に駆られる。なぜ。

ありえない、そんな馬鹿なと思う。けれど、コハルが一人で北に向かつてたのではないかと、そんな考えが浮かんで消えない。昨日彼女が行かないと言つたのを聞いた。行くはずがない。なのに、足は止まらない。昨日渡したあれを使うなら、不可能ではないかもしれない、などと思いついてしまつたら、もう足は止まらなかつた。

だが、杞憂かもしれない。だからリヨースケは、コハルがいなかつたらいいなかつたでいいのだ、と思うことにした。どうせ行く当てなどないのだから。だから、自分一人が勝手に慌てているだけなのだ。

まさか、まさか、ね。そう思いながら道を急いだ。

一面に広がるは、白。

その中にぼつねんと浮かぶ薄紅色に目を奪われる。

市街地にだけかろうじて作られた道。その北の端にコハルは一人で立っていた。正確には一人と一匹だ。けれど、リヨースケの目に映るのはコハルの姿だけだ。

「どうして……」

息を切らせリヨースケは尋ねた。一応は整備された道であろうと、雪が降り積もってしまえば歩きづらいのは変わらなかつた。平素とはあまりにも勝手の違う雪道を、それでもリヨースケは可能な限り急いだのだ。

「リヨースケさんなら来てくれると思つてた」

コハルはリヨースケの問いには答えず、微笑む。

「私の話をちゃんと聞いてくれたのはリヨースケさんだけでしたよ。だから、リヨースケさんとなら行ける気がするんです」

コハルの真つ直ぐな目が、リヨースケを射抜く。リヨースケは棒立ちのまま動けない。

「俺は……」

リヨースケの顔が歪む。

違うんだ、とリヨースケは呟く。

「俺はそんな人間じゃないんだ」

コハルの話を聞いたのは、彼女が思うような理由ではない。決してリヨースケが優しいからでもコハルが真剣だったからでもない。

「逃げてきたんだ。何も考えたくなくて、ただの思いつきでここに来ただけで。君の話を聞いたのだから、一人だと考えたくないことを考えてしまうからなんだ」

だから、コハルが思うような人間ではないのだと。そうしてリヨースケは俯く。顔を上げられない。

「じゃあ、どうしてここに来てくれたんですか」

コハルの声が降る。リヨースケはそれに答えられない。

「いいんです。リヨースケさんが来てくれなくても、一人で行くつもりだったから」

その声は意外にも明るい。コハルにはリヨースケを責めるつもりはないのだろう。けれど、リヨースケにとっては責めてくれた方が何倍もよかった気がした。だが、実際に責められたら、やはりリヨースケは同じように落ち込むのだろう。

「俺は……」

リヨースケは口ごもる。コハルを止める資格も、一緒に行く勇氣も、リヨースケは持ち合わせていなかった。リヨースケは結局何も言えずに、コハルがユキカブリと共に山へ向かうのを、ただ呆然と眺めていた。

このままでいいのだろうか。現実から目を背けて、両親から、故郷から、結果から逃げて、

挙句年下の少女からも逃げなのか。なぜ、自分はここへ、こんな街の外れまで来た？ コハルを止めるため？ 本当に？

本当は、共に行くつもりだったのではないだろうか。いや、と彼は否定する。だとしても、自分には追いかける資格なんてないじゃないか。けれど、リヨースケは思い出す。コハルの後ろ姿を。あんなにも小さな背中を、自分は放っておくのか？ 戦う術を持たないと自ら告げた彼女のことを、見て見ぬふりをするのか？

諦めるために、雪の降るこの土地に来たはずだった。けれどリヨースケは、この地で出会った少女を見捨てることなどできなかつた。諦めようとした彼の目には、諦めずにもがく彼女がひどく眩しくて、うらやましくて。おこがましいと言われるかもしれないけれど、彼女を手伝いたかつた。だからリヨースケはがむしゃらにコハルを追いかけた。

真つ白な雪に点々と残された足跡を目印にリヨースケは進んだ。進む先に澄んだ鈴の音が聞こえて、リヨースケは進む方向が間違っていないと安堵しながらひたすら歩いた。必死に斜面上り、点在する木々の間から薄紅色のコートが見えて、リヨースケはコハルに呼びかける。

「コハルちゃん……！」

名前を呼ばれたコハルが振り向いた。

「リヨースケ、さん」

「開く。またもや息を切らせて現れたリヨースケに、コハルは信じられないものを見たように目を見

「ねえ……コハルちゃん。俺も連れて行ってくれない？」

白い息を吐き出しながら、リヨースケは精一杯の笑顔を作ってコハルに向ける。

「なんで……」

コハルは顔を歪める。泣きそうだと、リヨースケは思った。嫌がられたとは微塵も思わなかった。コハルはぎゆうと薄紅色のコートの端を掴む。黒い鈴がりりん、と鳴った。

「俺も冬の神様が見たいから、じゃ駄目？」

とリヨースケが尋ねれば、コハルは顔を背ける。

「勝手にしてください」

とだけコハルは答えを返した。だから、勝手にすると行って、リヨースケは笑った。そつぽを向いたコハルが、それでも受け入れてくれたのだとリヨースケは知っていた。

「黒い鈴、役に立ったみたいでよかった」

「そうですね、おかげで今のところ野生のポケモンには会ってないですし」

リヨースケがコハルに渡したのは黒い鈴。ハジツゲタウンで火山灰を溶かして作られるガラス製品であり、土産物として販売されている。様々な色の鈴があり、黒い鈴の場合は鳴らすとポケモンが近寄りにくくなる効果がある。それ以外の色をした鈴の場合も、それぞれポケモンに対して影響を及ぼす。そのため単なる土産物としてだけでなく、ポケモントレーナーもよく購入している。同じ効果を持つビードロというものもあるが、現在は鈴の方が主流だ。

リヨースケもまた、例に漏れず持つていた。とは言え、ハジツゲ出身のトレーナーは大概持たされるものである。未熟なトレーナーには必要なものだ。と子を思う親は考えるのだ。

「でも、本当によかったんですか？ 私なんかもらって」

「うん。昨日も言ったけど、もう使わないんだ」

初心者トレーナー必携の黒い鈴をリヨースケはコハルに渡した。それはつまり、

「トレーナー、やめるから」

深い青の瞳が、リヨースケを見つめる。

「どうしてなのか聞いてもいいですか」

「いいよ。それに多分、誰かに聞いてほしかった気がするから」

リヨースケは語る。

彼がポケモントレーナーとして旅に出たのは十才の時だ。リヨースケがパートナーとして望んだのは、所謂初心者用のポケモンではなかった。

「小さい頃、テレビで見てからずっと、旅をするならあのポケモンって決めてたんだ。親には無理を言っちゃったなあ……」

リヨースケは遠くを見つめる。けれど見えるのはただただ白に塗り潰された光景。もしくは肌を踏わにした木々くらいだ。

「そうそう、サクラっていうんだ。あとでコハルちゃんも会ってくれるかな？ まあ、野生の

ポケモンが飛び出してきたらすぐに会うことになるけど」

コハルはもちろんと了承して、楽しみだと告げる。

そうやって、意気揚々と旅立ったリヨースケだった。しかしありふれた話だった。リヨースケにはそこまでの才能はなかった。誰もが夢見るリーグチャンピオンになど手が届く訳もなく。それどころか、ジムバッジを集めるのさえままならなかった。

「本当に……よくある話なんだ。自分でも、わかってるんだ」

リヨースケは苦い苦い笑みを浮かべる。

「才能の差って本当に残酷だよ。どんなに自分では努力したつもりでも、才能のある人には敵わないんだ」

己よりも後から旅立った者に抜かされ、年下の人間に負けて。それでも努力すればきつと。そう信じて、毎日毎日特訓に明け暮れた。そうして足掻いて足掻いて、旅立ってから五年が経ったある日。久しぶりに帰省したリヨースケに、両親は告げたのだ。

「一年前に、ポケモントレーナーなんてやめて、学校へ行けて、言われた」

「リヨースケ、そこに座りなさい」

父親がそう言った時にはもう、リヨースケはわかっていた。父親の真正面に座ったりリヨースケは、知らず知らず拳を強く握りしめていた。

「お前もわかっているだろう？ このまま続けたところで、時間を無駄にするだけだ。今なら

まだ間に合う。勉強して学校へ行きなさい」

わかっていた。知っていた。わかっていたけれど、突き付けられる現在の衝撃が弱まることなどない。

「無試験とはいかないが、トレーナーをリタイアした子供達が行く学校があるんだ」

リヨースケはただ黙って父親の話すことを聞いていた。頭の中が真っ白で、言葉は出て来なかった。

ポケモントレーナーを目指して挫折する子供達は数多くいる。それゆえ、救済制度が存在するのだ。中学に行かなかった子供達に中学レベル、下手をすれば小学校レベルから勉強を教えしてくれる学校が作られた。本人次第ではあるが、小学校レベルからスタートして四、五年もあれば卒業できる。

そういった父親の説明の大半はリヨースケの頭に入らなかつた。諦められなかつた。諦めたくなかつた。まだ自分にだつて才能はあるのだと、信じたくて。

「リヨースケさん？」

不意に掛けられた声にリヨースケははつとして、苦々しい思い出から我に返つた。突然黙つてしまったリヨースケを心配そうに見つめる青い瞳。リヨースケはその目から逃れるように視線を落とす。足元には真っ白な雪が冷え冷えとあるだけだつた。

リヨースケは日に焼けて浅黒くなつた顔を歪め、話を続ける。

「そんなに急に、諦められなかった」

だからリヨースケは、両親に掛け合った。あと一年で残りあと五つのバッジを集めてみせる、と。

「正直、自分でも無謀だっただけでわかってた。どんなに才能のある人でも不可能だっただけくらい、わかってた。でも、頑張れば少しくらいは手が届くんじゃなかった、思ってたんだ。たとえ八つ目までは無理でも、五つ目、六つ目まで手に入れたら認めてもらえるかもしれないって、思ったから。だから、死に物狂いで頑張って、四つ目は手に入れたんだ。だから、いけるかもしれないって思った」

けれど、当たり前だが現実には厳しい。

「でもさ、やっぱり無理だった」

その後はどんなにトレーニングを重ねようが、決して届かなかった。次のジムではジムリーダーにすらたどり着けなかった。

「は、はは……わかってたんだ。自分に才能がないってことくらい。わかって、たんだ」

「リヨースケさん……」

「で、時間切れ」

あっさりと言い放つたりヨースケの表情は言葉とは裏腹に、酷く複雑だった。

「今思うと、この一年はただ心の整理をするための時間だったんだと思う」

トレーナーをやめる。言葉にすればたったそれだけのことを受け入れるのに随分時間がか

かってしまった。リヨースケは自嘲する。

「雪を見たら、諦めるつもりで来たんだ。まだ自由に動けるうちに、やりたいことやって、ちゃんと諦められるように」

なのに、とリヨースケは手袋をした手で顔を覆う。

「諦めたく、ないなあ……」

コハルは何も言わない。雪が音もなく降り続ける。足を止めたのを不思議に思ったのか、ユキカブリがリヨースケのズボンを引っ張る。リヨースケはぼんぼんとユキカブリの頭を軽く撫で、ごめんごめんなんでもないよ、と謝る。

「コハルちゃんもごめんね、こんな話をしちゃって」

リヨースケは手をだらりと下ろし、無理矢理作った笑顔をコハルに向ける。

「もう、諦めるって決めたんだ。未練たらたらだけだね」

そう言っただけでリヨースケは話を打ち切った。そして、さあ行こうとリヨースケはコハルを促す。二人と一匹は止めてしまっていた足を動かし始めた。

「コハルちゃんは どうして冬の神様を探すの？」

長い沈黙のあとリヨースケは言った。先程喋りすぎてしまったのをごまかすように。

「おばあちゃんを元気づけたいんです」

詳しく聞いてもいいかと、リヨースケが尋ねるとコハルは頷いて言葉を続けた。

「おばあちゃんが元気ないというのは昨日話しましたよね？ でも、冬の神様の話をするとき

だけは少し元気になるから。だから、実際に会ってその話をしたいんです」

ただ話を聞くだけではなく、実際に会った者同士として話がしたいのだと。もう誰も信じてはいない冬の神だけれど、自分は信じているのだと、ただ機嫌を取るために信じたふりをしているのではないと、そう言いたくて。

「あわよくば、何か会えた証拠でも持ち帰れたらいいんですけどね。例えば羽とか。そしたら口先だけじゃないってわかってもらえるし、きつとおばあちゃん喜んでくれると思うんです」
絶対にほしい訳ではないけれど、とコハルは呟く。会うだけでなく羽までほしいなんて言ったら、罰が当たりそうだと彼女は笑った。

「それに、私が会いたいです。おばあちゃんのことじゃなくて、私は会いたい」
足を止めたコハルをリヨースケは見る。深い青がリヨースケを見つめ返してきた。

「どうして？」

さつきから聞いてばかりだとリヨースケは思う。

「私、キツサキが好きです。みんな雪ばかりで嫌だ、出て行きたいって言うけど、私は好きなんです」

コハルは笑う。コハルは笑っているはずなのに、酷く寂しそうに見えた。

「冬の神様は、キツサキを守ってくれているんです」

リヨースケは黙って続きを促した。

「キツサキは一年中雪に覆われています。だから外からの文化は中々入って来なかった。誰に

も入って来れなかった」

コハルは目を伏せる。

「キツサキは最後まで独立を保っていました。本州の人達は入って来れなかったから。でも、やっぱり人がやって来て。色んなものが踏みにじられた」

ろくに学校に行っていないなかったリヨースケにはよくわからない話だった。けれど口を挟まない方がいいような気がして、リヨースケは何も言わないことにした。

つかの間、コハルは黙る。沈黙を埋めるように雪がちらつく。

「たくさんのものが失われました。多分、私も知らないたくさんのものが。言葉も、今とは違ったのに、みんな使えなくなっている」

リヨースケはやはり何を言ったらいいかわからなくて、ただ黙っているしかない。

「そうしてみんな、大切なことも大切なものも、忘れて、わからなくなってる」

コハルの言葉はまるで独り言のよう。リヨースケの存在を忘れてしまったかのようにだった。

「ああ私、悔しいのかもしれない。誰も彼も、忘れてしまつて、私ばかり必死で」

知っていますか、とコハルはリヨースケに問う。突然のことに戸惑うリヨースケに構うことなくコハルは言葉を継いでいく。

「キツサキに一年中雪が降る理由を、みんなこう思っているんです。キツサキ神殿にいる巨人を封じ込めるためだって」

リヨースケは、昨日コハルに聞いた話を思い出す。観光地にもなっているというキツサキ神

殿。巨人がどうの、という話はたしかに聞いた。

「たしかにそういう話もあるんです。今はキツサキ神殿にたくさん人が集まるし、観光でお金稼がないと、キツサキはやっていけないし。だから、そちばっかり有名になるのは仕方ないんです。でも、私は」

「冬の神様の方がいい？」

コハルの言葉を代わりに引き継ぐ。彼女は軽く頷き、肯定の意を示す。

「はい。私はそうだと思いたい」

曖昧にコハルは笑う。

「私は、やっぱり冬の神様がいて信じてたいんです。おばあちゃんが教えてくれたことが、本当だって」

しばらく押し黙ったコハルはぼつりと呟く。

「その声、歌うように美しく、凍てつく羽を持ち、その目閉ざされたのち、全てのものは頭（こうべ）を垂れる」

「それは？」

「冬の神様の伝承にある一節です。ふと思い出しちゃって」

そうしてコハルは聞き逃してしまいそうなほど小さな声で呟いた。もう誰も覚えていないけど。

一面に広がるは、白。

空は飽きることがないようで、白い欠片が降り続いている。吐く息も白。太陽もないのにリヨースケの目はちかちかした。

どれだけ歩いたか、感覚も麻痺してわからなくなった頃。ぼつかりと開けたところに二人と一匹は出た。足は重く、持ち上げるのにも難儀するほど歩いたりリヨースケは、ほうと息をついた。

「どこにいるんだろうね」

ぼつりとこぼす。まだ先なのか、どこまで行けばいいのだろうかと先を見る。雪に覆われた山肌が少しだけ遠くに見えた。なぜだか広場のようになっていてそこには、木があまり生えていなかった。

「……もう、戻りましょう」

リヨースケは傍らの少女を見遣る。本当にいいのと尋ねればコハルは首を縦に振った。

「わかってたんです……どうせ私には見つけられないって。私の前に、冬の神様は現れてくれないって」

それはまるで、先程のリヨースケのようだった。だから、という訳ではないが、リヨースケは何故と尋ねた。

「きつともう、冬の神様は人間なんて嫌いなんです。忘れてしまった人間の前なんかには、現れてくれるはずなんてなかったんです」

だから、もう戻りましょうとコハルは繰り返す。もう、いいんですと。

「コハルちゃんがいいなら。わかった、戻ろう」

コハルがそう言うなら仕方ない。そうして踵を返したときだった。

「ユキちゃん？」

それまで大人しくコハルに付き従っていたユキカブリが、怯えるように彼女にしがみついたのだった。コハルが足を止めたので、リヨースケも歩みを止める。一体なんだと疑問に思った時だった。ぴん、と空気が張り詰める。

高く澄んだ音が聞こえた。まるで美しい歌声のような。雪が降り積もっているせいか、音はあまり響かない。びゅう、と強く風が吹いて、はつとして二人は振り向いた。

氷の鳥がいた。冴え冴えとした美しい羽に覆われた鳥は、リヨースケ達をじつと見ていた。時が止まったかのように、誰も動かない、動けない。

「あ、あ……」

コハルがわずかに声を発するが、言葉にならない。

動いたのは氷の鳥だった。それを見たりヨースケは、反射的にかじかんだ手を動かしていた。

「サクラ、かえんほうしゃ！」

炎を纏ったポケモンが現れたと同時に、リヨースケは叫んだ。途端、冷気と熱気がぶつかり合い、蒸気と強風でリヨースケは思わず目を閉じる。風がおさまり、前を見れば炎を纏った一角獣、ギャロップがいた。ギャロップは主人に視線をやるでもなく、氷の鳥を真っ直ぐに見てい

た。

対する氷の鳥は少しも慌てた様子もなく、ただ悠然とその場に留まっていた。

これは神と言われるほどの力を持つことからくる余裕だろうか。リヨースケは思った。しかしリヨースケはこの考えを振り払う。今は考えているときではない。氷の鳥はどうやらこちらに敵意があるようだ、と判断する。不意打ちに近い形で何らかの技、おそらくは「ふぶき」を放ってきたのだ。コハルのユキカブリは当てにならない。戦えるのはギャロップだけだ。

「サクラ、もう一度だ！」

いきなりボールから出されたにもかかわらず、ギャロップはなんら躊躇うことなく口内に炎を溜め、それを放出する。氷の鳥は、目を閉じて攻撃するような様子を見せない。リヨースケはわずかに違和感を覚えつつ、それを振り払う。炎タイプと氷タイプなのだ、タイプはこちらが優勢。このまま押せばいい。

「もう一度、かえん……」

リヨースケが指示を繰り返そうとした時だった。氷の鳥が目を見開いたかと思うと、空気がぴしりと音を立てた。どう、とギャロップが雪の中に倒れ込む。

「な……」

リヨースケは呆気に取られる。何が起きたのかわからなかった。ギャロップの炎は消えていないところを見るに、まだ息はあるだろう。けれど、これ以上の戦いは無理なのは明らかだ。このままではまずいとリヨースケは思いながら、ギャロップから目が離せない。

せめてコハルだけでも逃がさなくてはと、横に立つ彼女を見る。コハルは真っ直ぐ氷の鳥を見ていた。何を思っているか、リヨースケにはわからない。喜び？ それとも恐怖？ とにかく守らなくてはと、リヨースケはコハルの前に立とうとした。

けれど、それまでコハルにしがみついていたユキカブリが、何か声を発しながら前へ出た。説得でもしようとしているのだろうか。リヨースケは思う。同時に無茶だ、とも。しかし意外にも氷の鳥はユキカブリの声に耳を傾けているようだった。ユキカブリはこの土地のポケモンだからだろうか。ギャロップのような異分子とは違うのか。

今のうちに逃げた方がいいのか、ともリヨースケは思ったが、下手に動いて氷の鳥を刺激するのは良くないのではと考えると動けなかった。コハルも動く気がないので余計に逃げるのは難しかった。

と、甲高い声が真正面から聞こえた。歌うような美しい声、というのには本当だったなどとリヨースケは思う。次の瞬間、前から雪混じりの強い風が吹いて、視界は白で覆いつくされた。そこでリヨースケの意識は途絶えた。

「……さん、リヨースケ……さん、リヨースケさん」

左頬にざらりと生暖かい感触を感じてリヨースケは目覚めた。

「サクラ？」

声に反応してか、ギャロップは舐めるのをやめ、鼻先をリヨースケの顔にぐっと押し付ける。

リヨースケはその馬面を優しく撫でた。ふと右を向けばやけに肌の白い少女の顔が見えた。

「リヨースケさん、大丈夫ですか」

「コハルちゃん……」

ギャロップを軽く押しやり、リヨースケは上半身を起こす。まだぼんやりとする頭を軽く振る。

「あー……ここは……」

辺りを見回しても、どこもかしこも雪で真っ白でどこなのかわからない。どうやらコハルもわからないようだった。

「まあ無事だったからいいか。ポケナビあるし方角わかれば多分帰れるよ」

コハルは見るからにほっとした様子だった。

それにしても、とリヨースケは言う。

「あー負けた負けた。完璧に負けた」

せつかく起こした上体を、また雪の上に投げ出す。見上げても鈍色の雲があるだけの空。

戸惑っている様子のコハルを置き去りにリヨースケは言う。

「完膚なきまでに負けたなサクラ。ごめんな、俺弱くて」

あーくそとリヨースケは仰向けのままひとりごちる。

「やっぱり圧倒的だなー、敵わないや」

清々しい顔をしてリヨースケは笑う。

「これですつぱり諦められるよ」

あの、とコハルが遠慮がちに声をかける。

「ん？ ああごめん。何？」

「大丈夫、ですか」

「けがはないよ。頭を打ったわけでもない。ただ、そうだな、やっと現実を受け入れただけ」
そう言って起き上がるリヨースケだったが、首元に違和感を覚えてマフラーに手を突っ込む。
「これって……」

出てきたのはまるで氷のように透き通った羽。コハルも驚いたのか目を見開いている。

氷の鳥、否、冬の神が落とした羽。太陽でもあれば光に透かして見るのに、などトリヨースケは考え、無造作にコハルへ差し出す。

「はい、コハルちゃん」

目を白黒させ、コハルは差し出された羽を受け取る。

「いいんですか」

「何が？」

「だって……」

「いいんだよ、俺が持つても仕方ないし。おばあちゃんに見せてあげなよ」

そう言えば、コハルはやっと笑ってありがとございますと礼を言う。

「リヨースケさんのおかげで、冬の神様に会えました。本当に、ありがとございました」

深々と頭を下げるコハルに、リヨースケは慌ててやめてほしいと告げる。
「お礼を言うのはこっちの方だよ。やっとな、自分の弱さを認められた。ありがとう。これでようやく前に進める」
さあ帰ろうとリヨースケはコハルに手を差し出した。